
皇帝の花

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

皇帝の花

【Nコード】

N3695D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ローマ皇帝ネロ。彼は薔薇を愛し薔薇に包まれることを常に願っていた。それこそが人々が彼に贈る愛の証であった。そしてそれは最後までもそれからも。実際のネロは暴君でもなかったそうです。

第一章

皇帝の花

金髪が見事にカールした美青年であった。顔立ちもしっかりとしていてその雰囲気も見事なものであった。

名門の出身でありその出自に卑しいところは何一つとしてなかった。カエサルとアントニウスの血を引きローマでは最高の毛並みのよさであった。

人柄は温厚で芸術を愛した。教養があり政治にも理解があった。彼を批判する者はこの時代においては少なくとも少数派であった。

ローマ皇帝ネロ。彼は決して評判の悪い男ではなかった。少なくとも彼が生きているうちは。

「ネロは今日もコロシアムの剣闘士を助けた」
「全く慈悲深いことだ」

ローマの市民達は親しみを込めてネロの話をする。彼等にとってもネロは何かというと催しを行い物を与える気前のいい皇帝であり親しみのある男だった。だからこそ市民達はネロに対してこぞつてあるものを捧げたのである。

「陛下、これを」

「さあ今日も」

「うむ、有り難う」

豪華な金の馬車に人々が集まりそこに乗るネロに次々にそれを捧げていた。見ればそれは薔薇であった。彼は笑顔で薔薇を受け取っていたのだ。

「悪いな、いつもいつも」

「何を言われます」

「陛下がこれを愛しておられるからです」

彼等は笑顔でネロにそう告げる。そうしてさらに薔薇を差し出すのであった。薔薇は忽ちのうちに馬車に満ちネロが隠れる程になっ

た。だが彼はそのことにかえって満足した顔を見せるのであった。

「おい、少し待て」

それを見て衛兵達が市民達を制止する。

「それ以上薔薇を捧げれば」

「陛下がお困りになられるぞ」

「いや、いい」

だがネロはかえって衛兵達を制止してさらに薔薇を受け取るのであった。

「この花は皆が私に捧げたものだ。喜んで受け取らせてもらおう」

「しかし陛下」

「このままでは馬車が動けません」

「後は私の宮殿に届けさせてくれ」

ネロは機転を利かせて彼等にそう述べるのであった。

「それならば構わないな」

「それはそうですが」

「私は。この花が好きだ」

うつとりとさえた口調での言葉であった。

「この薔薇達に囲まれていればいいのだ。それに」

「それに？」

「私を愛する市民達がこの花を捧げてくれる。これ以上の喜びはない」

「こつも言つのであった。」

「だからだ。喜んで受け取らせてもらおう」

「左様ですか」

「まずは宮殿に帰ろう」

「その中で言おう。」

「そして宮殿でさらに薔薇を楽しもう。それでいいな」

「わかりました。それでは」

「では市民達よ」

ネロは自分の周りに薔薇を持って集まる市民達に対して言った。

見れば彼等は赤に白に黄色にピンクにとみらびやかなまでである。その手にある薔薇の色に彼等までが染められているようであった。

「宮殿の前で。また」

「はい、また」

「陛下、お待ちしています」

ネロは彼等と別れ自身の宮殿に向かった。そうして市民達からありったけの薔薇を受け取りそれ等をプールに入れ、他にも使うように命じた。彼は宮殿に帰るとまずはそのプールに入った。そこには様々な色の薔薇の花びらが浮かんでいる。彼はその中で気持ちよく泳いでいた。

その彼のところに壮健な身体つきの軍人が来た。彼の衛兵隊長であるブルズである。彼はネロの側まで来て彼に告げるのであった。

「食事の用意ができました」

「そうか、早いね」

ネロは彼の言葉を聞いて満足した顔で微笑むのであった。それからさらに彼に問う。

「いつものようにしてくれているね」

「無論です」

彼はすぐに主に述べた。

「それはもう既に」

「それじゃあ。行くか」

ネロはプールから上がって言う。その身体は繊細ながら引き締まったものであった。その顔とバランスの取れた見事と言える体格であった。

ブルズはその彼に素早く服を着せる。ローマの服である。

服を着せられたネロはそのブルズを従えて宮殿の中へ向かう。彼の身体からは薔薇の香りが漂い続けている。

その薔薇の香りを自分でも楽しみながら。彼はブルズに問うた。

「セネカは来ているね」

「はい、先程から」

ブルズは厳かに主に答えた。

「もうお待ちであります」

「わかった。では待たせるのは失礼だ」

にこりと笑って彼の言葉に頷き。そうして宮殿の中に入った。

大理石で造られた宮殿の中の至るところにギリシア風の彫刻がある。そこには逞しい神のものもあれば美貌の女神のものもある。ネロはそういつた彫刻達を眺めながら宮殿の中を進む。そうして広い一室に入ったのであった。

「陛下」

彼の姿を見て奴隷達がかしづく。だが彼は鷹揚に手を出して彼等に対して穏やかにするように告げた。

「そんなに畏まることはないよ」

「はっ」

「それでは」

彼等はそれを受けて立ち上がる。そうしてその場で彼をベッドに連れて行く。この時代のローマの宴は寝たまま行つ。だからネロもそれに倣い寝そべつたのである。

ブルズもそれに続く。それを見て一人の老人もベッドに横たわつた。彼こそがセネカ、ストア派の学者でありネロの師でもある男である。実質的にローマの宰相であった。

「セネカ、来てくれたんだね」

「陛下の御呼びとあらば」

セネカは愛弟子に対して穏やかに述べた。

「喜んで参上致します」

「有り難う。それじゃあいいね」

「はい」

また弟子の言葉に応える。

「喜んで」

「私はいつも思うんだ」

彼は自分の師に対して述べるのであった。

「こうして市民達が薔薇を贈ってくれるそのことこそ私への愛情の証なんだって」

「その通りです」

セネカはネロのその言葉を認めた。

「陛下は薔薇を愛しておられます。その薔薇を彼等が贈ってくれるこのことこそ」

「私への愛の証なのだね」

「はい。願わくばこの薔薇達が何時までも贈られるように」

「そうだね」

ネロは笑顔で師の言葉に頷く。そうしてまた言うのだった。

「この薔薇の味がする酒も」

黄金の杯を手取る。そこにあるワインは薔薇の香りを入れた水で割られている。この時代のワインは必ず何かで割られていたがネロはそれに薔薇の水を使っているのだ。

第二章

「そして」

「この薔薇の花びら達も」

「そうだ」

今度はブルズの言葉に頷く。彼もまたネロやセネカと同じく宴の場に寝ていたのであった。

彼等は同じものを見ていた。壁を。

見れば壁は動いていた。機械仕掛けで動かしているのであった。芸術を愛するネロが作らせたものでありそこでは四季が常に動いている。そこにもまた薔薇の花びらが飾られている。彼等はその薔薇の花達を目でも楽しんでいたのである。

「愛している。何時までも」

「私もです」

ブルズはネロをじっと見て答えた。

「愛する陛下が愛されているこの花達を」

「愛してくれるのだな」

「そして陛下も」

「そうか。ではブルズ」

ネロはブルズに顔を向けた。そうして言うのだった。

「御前には白薔薇を与えよう」

「私に白薔薇をですか」

「そうだ」

穏やかな顔でブルズに告げた。

「御前の純粋な心はまさに白薔薇だ。だからこそ」

「有り難き幸せ」

「そしてセネカ」

今度は師であるセネカに顔を向けた。

「貴方には紅薔薇を」

「私は紅ですか」

「いつも私を気遣ってくれるその温かい心だ」

それを紅薔薇に例えたのである。彼の詩情が出ていた。

「それを讃えたい。いいか」

「喜んで」

セネカもまた笑顔で彼の贈り物を受けたのであった。

「そして市民達には幸福を願いたい」

「それでは何を」

「男には黄色の薔薇を」

黄色は即ち黄金である。市民達に黄金を贈るというのだ。

「女にはピンクの薔薇を」

ネロはこれは女の優しさを表わすと考えていた。それもまた贈るというのだ。

「それぞれ贈りたい」

「では陛下は」

「私はこれだ」

穏やかな笑みを浮かべたその前にデザートが置かれた。それはプディングであった。

「それは」

「薔薇を入れてある」

見ればそのプディングにもまた薔薇を入れてあった。その色に染まっている。そしてその色は。

「紫ですか」

「そうだ。皇帝の色だ」

そうセネカとブルズに告げる。

「私は皆と共にいたいのだ。薔薇と共に」

「薔薇と共に」

「願わくば死しても薔薇に囲まれていたい」

彼はこうも言った。

「私が愛し、皆が私を愛してくれている証であるこの薔薇をな」

「左様ですか」

「贅沢な願いだらうか」

ネロはここでふとそう思った。

「これは」

「いえ」

だがセネカは愛弟子のその言葉に対して首をゆっくりと横に振った。それからまた述べるのであった。

第三章

「そうではありません」

「そうなのか。よかった」

「人はそれについては誰もが同じです」

そうして教師としての顔で弟子に教えてきた。

「人から愛されたいと思うのは。ただ」

「ただ？」

「陛下はそれを強く望まれ過ぎるように思えます」

繊細で人が自分をどう思っているかを常に気にかけている彼の性格を指摘してきた。

「それを御気をつけ下さい」

「それなのか」

「左様です」

慎んだ声でそう言うセネカであった。

「願わくば。そして常に」

「常に？」

「それでも陛下のお側に愛と薔薇がありますように」

「有り難う」

ネロは師の言葉にまた頷くのだった。

「それでは何時までもその中にいるようにこれからも」

「お進み下さい」

「では皆にも振舞おう」

ネロはそこまで聞いてセネカ達に告げた。

「この薔薇のプディングとワインを」

「薔薇をワインをですか」

「うん」

ブルズに述べた。

「是非共味わってくれ。いいね」

「畏まりました。それでは」

「喜んで」

「皆が何時までも私を愛してくれて」

ネロは彼等のところにそのプティンクが置かれるのを眺めながら
呟いていた。

「薔薇が贈られるように」

それこそが彼の願いであった。そして市民達はそんな彼に薔薇を
捧げ続けた。彼は薔薇を受け取る度に笑顔になるのであった。

「私は愛されている」

それを実感するのであった。

「やはり。皆から」

「陛下どうぞ」

「この薔薇を」

市民達も貴族達も兵士達もこぞって彼に薔薇を捧げる。彼はいつ
も薔薇に囲まれ機嫌をよくさせていた。

「お受け取り下さい」

「どうぞ」

「うむ、喜んで」

そしてネロはいつもその薔薇を笑顔で受け取る。様々な色の薔薇
達を。

それこそが彼の喜びで。その薔薇を食べて飲み、慈しんでいたの
だ。

「彼等にこの薔薇に見合うだけのものを」

薔薇を眺めながら政治を考えていた。

「催しを見せてあげるんだ」

「はい」

「そして負担を軽くして」

彼は相変わらず市民達には気前がよう奴隷達には慈悲深かった。
芸術を愛しそこでも薔薇に囲まれていた。しかしそうした生活の中
で彼に取って代わりうとする者達も出ようとしていたのであった。

彼等は黒薔薇を合図の印に会合を重ねていた。元老院の貴族達や総督達がそこにいた。

「ネロは今あまりにも市民の機嫌ばかり取ろうとしている」「情弱だ」

実はネロは軍を率いたことがない。強大な軍事国家であるローマの皇帝であるのにだ。彼は芸術を愛しているが戦争を愛してはいなかったのだ。

「そしてあまりにも芸術に耽溺し」

「それでも市民の一部から反発を受けている」

「ギリシア的過ぎる」

こうした批判も確かにあった。ネロはセネカが指摘したその性格故に彼が愛してくれることを望んでいる市民達の一部からもこう思われていたのである。

「それをよく思っていない風潮がまだローマにあると知っていても」「問題ないと思っっているのだな」

この時代ローマはかなりギリシア文化の影響を受けていた。ネロはその最右翼であったのだ。しかしその一方でローマの伝統を守るうという考えも根強かった。これは大カトーの頃から存在していたのだがその勢力がネロを快く思っていないのは当然のことであったのだ。

「そのようだ」

「ふむ。では彼等に働きかけよう」

「元老院にもな」⁸

元老院は皇帝を撃射出来る。この時代のローマは一応は共和制だったのだ。皇帝とはいってもその共和制を守っているというのが形式だったのだ。

「声をかけておくか」

「金もな」

工作についても話された。

「見返りと共に」

「そしてやはり武力か」

「地方の総督達だ」

地方を収め武力を持っている者達の力もまた目をつけられた。こ
うした行動において武力が決め手となるのは何時の時代でもそうで
ある。だからこそ軍人が革命を起こせるのである。

「彼等にも見返りを」

「うむ。ではそちらもな」

話が為される。

「決まりだな」

「ではこの方針で行くか」

「おおよそはな」

「皇帝に気付かれずにな」

相手に気付かれては元も子もない。それも警戒された。

「そして彼の周りには市民達にも」

「彼等は相変わらずか」

ネロは市民と奴隷達には愛されている。それを指摘するのであつ
た。

「うむ。皇帝に薔薇を贈っている」

「相変わらずだな。皇帝の薔薇好きは」

「だが。それで面白いことができる」

中の一人が楽しそうに笑った。

「面白いことがな」

「何をするつもりだ？」

「趣向がある」

その者が囁くのだった。

「面白い趣向がな。任せてくれ」

「そうか。それは任せていいか」

「うむ」

「それでは諸君」

「新しいローマの為に」

彼等はそう言い合って別れた。後には黒薔薇だけが残された。後日のこと。やはりこの日も薔薇に囲まれ市民達の愛を確認しているネロのところにもまた薔薇が届けられた。しかしその薔薇を見てネロは顔を曇らせるのであった。

第四章

「どうしてこの薔薇が」

「どうされたのですか？」

「これを見てくれ」

従者の一人に対して告げる。

「今贈られた薔薇を。これは」

「黒薔薇ですか」

「そうだよ。どうしてこれが」

ネロはその黒薔薇を指差して不吉なものを自身の顔に浮かべていたのだった。

「私のところに」

「では捨てられますか？」

「いや」

だが彼は従者のその言葉には首を横に振るのだった。

「何かの手違いかも知れないし。それに薔薇であることに変わりはないから」

「宜しいのですか」

「うん。これはこのままでもいいとした。」

「飾っておいて欲しい。それでいいね」

「わかりました」

従者は主の言葉に頷くのであった。

「それではそのように」

「うん。しかし」

あらためて自分の周りの薔薇達を眺めながら述べるのだった。

「皆いつもこうして薔薇を届けてくれるのを見ると。私が愛されているのがわかるよ」

「そうですね」

従者もその言葉には笑顔になる。彼もまたネロを愛しているのだ。彼はかつては奴隷だった。その彼を解放して側に置いてくれているのだから。恩に感じていない筈がなかった。

「皆陛下のことが」

「だからこそ私は」

ネロはあらためて決意するのだった。

「彼等の為に政治をしたい」

「はい」

そんなことを話していた。だがその時だった。

「陛下、大変です！」

衛兵達が飛び込んで来たのだった。

「どうしたんだい？」

「謀反です！」

衛兵達は息を切らしてネロにそう告げた。

「総督達が謀反を！元老院もまた！」

「元老院が！？」

「陛下をローマの公敵だと！宣言しました！」

「馬鹿な、そんな筈が」

ネロはそれを信じようとはしなかった。彼は元老院の議員達とも親しくしていたからだ。その彼等にこうして公敵宣言されるなど考えもしなかったことだったのだ。

「彼等が。どうして」

「市民達も奴隷達も！」

続けて報告が入った。

「陛下に対して叛乱を！ローマはもう！」

「どうしてだ、彼等が私を愛さない筈がない」

市民や奴隷達まで叛乱を起こしたと聞いてネロは完全に我を失った。今手許にある薔薇達を抱えて言うのだった。

「こうして。薔薇を贈ってくれているのに」

「ですが真です」

「げんにこの宮殿に兵士達と共に」

衛兵達は呆然とする主に対して告げるのだった。彼等も無念な声で。

「向かって来ております」

「このままではこの宮殿は」

「何かの間違いだ」

ネロは蒼白になって今までの報告を否定するのであった。顔はもう強張り割れた仮面のようになっていた。

「彼等が。皆がどうして」

「陛下、何かの策謀かも知れません」

彼の側近達がそんなネロの周りに集まり囁く。そうして必死に彼の心を落ち着けさせようと努力していた。

「ですがここは」

「お逃げ下さい」

「逃げるといつても何処に」

「私の別邸に」

彼に解放された奴隷の一人が申し出てきた。彼の信頼する者の一人である。

「まずはそこで難を逃れましょう」

「だが私は」

ネロはまだ冷静さを取り戻してはいなかった。議員や市民達に裏切られたのだという思いからまだ立ち直れていなかったのである。

「もう愛されてはいないのだ。だから」

「それは何かの間違いです」

「そうです、ですから」

側近達はそう言って必死にネロを勇気付けようとする。

「ここは退きましよう」

「そうして再起を」

そうしてネロを半ば強制的に別邸まで連れて行った。衛兵達が守りそうして慌しくローマを脱出した。その間ネロは茫然自失であり

何も語るうとはしなかった。ただその手にある様々な薔薇達を見ているだけであつた。

何とか別邸に着いた。一行はそれで一応は胸を撫で下ろしたのであつた。

「これで大丈夫か」

「一先はな」

一息ついたところで。主に対して述べるのであつた。

「陛下、落ち着かれましたら」

「どうか賊を討つように御命令を」

「賊をだね」

「そうです」

まだ虚ろな声のネロに対して申し上げた。

「そうすればまたローマに戻れます」

「御安心下さい」

こつも述べるのであつた。

「我々もいますので」

「そうか。そうだね」

ネロはまだ虚ろな様子だが応えた。彼等はそれを見て何とか安心するのだった。だが。

第五章

「けれどここには薔薇がない」

「それもすぐに」

彼等は慌ててネロに告げた。

「届きますので」

「お待ち下さい」

「いや、もういいんだ」

ネロは氣遣う彼等に対して優しい声で返すのだった。

「私はもう」

「あの、陛下」

「まさか」

「あれを持って来てくれ」

力なく言うだけだった。

「あれを。いいね」

「ですがあれは」

「陛下はまだ」

「私はもう。わかっているんだ」

その力ない声のまま言うだけであった。それが今のネロの全てで

あった。

「私に薔薇を贈ってくれるのではなく剣を突きつけてくるのだから。だから」

「宜しいのですか」

「もう。それで」

「反逆者達が欲しいのは私なのだろうか？」

「こつも問う。」

「君達には関係ない筈だ」

「それはそうかも知れませんが」

「それでも我々は」

「一人でいい」

そんな彼等を拒絶するようにして告げた。

「いいね。君達はこれからも」

「そうですか」

「ではこれで」

「わかつてくれたらあれを持って来てくれ」

穏やかな声で彼等に言う。

「いいね」

「はい」

「それでは」

今度は彼等が力なく頷き一輪の黒薔薇を持って来た。そうしてそれをネロに手渡すのであった。

「これで宜しいですね」

「うん」

ネロは手渡されたその黒薔薇を見詰めながら答えた。

「これでいいよ。ただ一つだけ皆に言い伝えて欲しいことがあるんだ」

「それは。何でしょうか」

「私がいなくなったら」

彼は言う。

「私がそこにいる場所にも薔薇を飾って欲しい。それだけを伝えて欲しいんだ」

「わかりました」

「それでは」

「そんなことが起こる筈がないのだけれどね」

悲しい笑みを浮かべて呟くネロであった。

「だから今こうしてここにいるのだから」

「ですからそれは」

「殆どの者は陛下を」

「それでも。剣を突きつけられたから」

ネロにとつてはそれだけで立ち直れないものがあつたのだ。あまりにも繊細なその心はそのことに耐えられなかったのだ。彼は薔薇を欲していた。しかし剣を欲してはいなかった。そういうことである。

「もう。いいんだ」

「そうでしたね」

「では。これで」

「さようなら」

別れを告げると黒薔薇の花びらを口に入れた。それで全ては終わったのであつた。

ネロの追つ手達が別邸に来た時には全てが手遅れだつたという。もうネロは死に向かつていた。彼は皇帝として誇り高く死ぬことができたのだつた。

この時彼は追つ手の一人にこう言つたと伝えられている。

「もう遅い。これがそなたの忠誠か」

と。だがこれは真かどうかはわからない。芸術を愛した彼は死の間際に今この世で最も偉大な芸術家が死ぬと言つたとも言われている。だがこれも真相はわからない。

だが一つだけ確かなことがある。それは花についてであつた。

「私のいる場所にまた薔薇を」

この言葉はローマ市民や奴隷達、そして多数の貴族や議員達、彼に刃を向けなかつた者達に伝わつた。彼等はネロを愛している者達だつたのだ。

「皇帝は死んだのか？」

「いや、それは嘘だ」

彼等はこちらも言い合つたのだつた。

「彼はきつと歸つて来る」

「そうだ、このローマに」

中にはネロが死んだことすら認めない者がいた。奇しくもこれはネロがそれだけ彼等に愛されていたということであつた。

「帰って来るさ」

「そうしたら今も」

ネロが死んだ後ローマは暫し皇帝の座を巡って混乱に陥った。それは一年続きローマの者達にとってはいい時代ではなかった。それによりネロの治世を懐かしんだのだ。

第六章

「ネロは優しかった」

「気前もよかった」

自分の玉座を維持するのだけに必死で市民達に対して吝嗇な後継者達をそう言つて批判するのだった。それはそのままネロへの同情ともなつた。

「ネロの方がいい」

「ネロを殺したからこうなつたのだ」

彼等はこうも言つた。奴隷達ですら。

そんな彼等がすることは一つだった。彼等は薔薇を手に集まるのだった。

ブルズと共にいた兵士達は白薔薇を。セネカと共にいた貴族達は赤薔薇を。男は黄薔薇を。女はピンクを。奴隷達もそれぞれ薔薇を持って行くのだった。

「ネロに捧げものを」

「彼が望んだことだから」

そう言い合つてある場所に向かうのだった。そこは。

そこは墓であつた。皆ネロの墓の前に薔薇を持って集うのだった。そうして薔薇が捧げられる。ネロの墓は忽ちのうちに薔薇に囲まれ墓石が完全に隠れるまでになつた。まるで薔薇の園のようであつた。

「陛下にこれを」

「生きておられた時と同じように」

そう言い合つて薔薇を捧げる。

それは常に続いた。何時しかネロの墓が薔薇の園になる程であつた。それを見てかつてネロに仕えていた者達は話すのであつた。

「陛下は天国で喜ばれている筈だ」

「そうだな」

静かにその薔薇達を見ながら話す。その香りが彼等のところにまで及んでいる。

「愛されていることを望んでおられたが」

「この世を離れられてもまだこうして愛されている。その証が」

「あの花だ」

薔薇達を指して言うのだった。

「薔薇こそが」

「しかしだ」

ここで彼等は不思議に思うことがあった。

「どうして陛下は薔薇をあそこまで愛されたのだ？」

そこが謎だったのだ。愛するにしろネロのその愛情は異常だったからだ。彼等はそれを思い出し今こうしてそれを考えるのであった。

「何故あそこまで」

「薔薇を」

「それについてだが」

ここでかつての従者の一人が言うのだった。

「聞いたことがある」

「その薔薇についてか」

「うむ。今からそれを話そう」

仲間達に対して述べる。

「それでいいな」

「是非共」

「頼む」

仲間達もその言葉に伝えて言う。

「それは。陛下が最初に受けた贈り物だったかららしい」

「最初のか」

「そうだ。ご幼少のみぎりな」

ネロは幼い頃不遇だった。母が兄であるカリギュラに疎まれ流罪にされていたのだ。そうしてそこで寂しい幼年期を送っていたのである。

「奴隷の一人から貰ったらしい。一輪の野薔薇を」

「そうか、それで」

「陛下は薔薇を」

「今陛下はその薔薇に囲まれている」

そのことを話したうえでまたネロの墓を見た。本当に墓石すら見えなくなっていた。見えるのは様々な色の薔薇達だけであった。

「陛下は。喜んでおられる」

ネロの姿は何処にもない。だが薔薇の香りが辺りに満ちていた。

ネロの愛した香りが辺りを支配していた。まるでそこそが彼の喜びであるように。何時までも香っていた。

皇帝の花 完

2007・11・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3695d/>

皇帝の花

2009年3月24日10時10分発行